

歴史民俗資料館 特別展

# たのしむ・語らう 大阪の書画

歴史民俗資料館では、3月14日(土)～5月17日(日)、江戸時代後期から昭和前期に大阪で活躍した絵師の作品を公開する特別展を開催します。ここでは展示の内容を紹介いたします。

## 書画の「たのしみ」

書画は、近世近代の大阪において、人々が共に楽しみ、作品を前にして語り合うための、1つのコミュニケーションツールでもありました。展示作品から、3つの「たのしみ」をご紹介します。

### ① 画題を楽ししむ

松竹梅や鶴亀、七福神、仙人……これらは長寿や福を象徴する縁起の良いモチーフとして、吉祥画題と呼ばれます。特に商都大阪では、経済的繁栄を願う人々に好まれ、頻繁に描かれたと考えられます。

上田耕甫《老松双鶴図》(図1)は、吉祥画題の定番である松と鶴を描いた作品です。松は常緑の植物であるこ

とから「不老長寿」を象徴し、つがいの鶴を合わせて描くことで、夫婦の不老長寿を祝う意味になります。

このような画題の意味は、絵を見る人、飾る人に知識として共有されてきました。人々は、吉祥の絵画とそこに込められたおめでたい意味を楽しんでいたのでしょうか。

### ② 自ら娛しむ

また、知識人が旅や友人を巡り、心の感興を詩画に表した「文人画」では、「自娛」＝作者が詩書画の創作を通して「自ら娛しむ」という考え方がありました。彼らは理想の山水を描き、絵の中で自らの精神を遊ばせることを大事にしました。

上田耕夫《滝見山水図》(図2)は、文人たちが山間の谷間で滝を見上げて杯を交わす様子を描いています。耕夫は江戸時代に活躍した池田北ノ口(現在の木部から新町に当たる)の出身とされる絵師です。写生派の円山応挙に師事しましたが、文人画の大家・与謝蕪村の画風に引かれました。画中の人物と一緒に描かれた滝(山水)を楽しむことが、1つの書画の見方として定着していたのでしょうか。

### ③ 季節を愉しむ

さらに、近代大阪では、四季の花

鳥や風俗を写生的に描いた作品が人々に広く親しまれました。

須磨対水《葉桜稚鮎図》(図3)は、美食家としても知られた絵師による一幅です。縦長の画面に、初夏、花が散って若葉となった頃の桜と、成長途中にある若鮎が描かれています。シンプルな構図ですが、若葉の緑色と流水の水色の対比が爽やかな印象を与えます。

このような作品は、季節を表す調度品として、四季折々の床の間に飾られました。現在では「コテコテ」のイメージが強い大阪文化ですが、日々の楽しみみとして好まれたのは、あっさりとした情趣のある作品であったようです。

このように、大阪の人々は、床の間に掛けられた書画から、美しさを感じるとともに、さまざま「たのしみ」を得ていました。

展示では、いずれも市指定文化財の



◀(図1) 上田耕甫《老松双鶴図》



◀(図2) 上田耕夫《滝見山水図》



◀(図3) 須磨対水《葉桜稚鮎図》

大岡春卜の大作《涅槃図》(久安寺蔵)や吉村周山の襖絵《松梅に鶴図》(託明寺蔵、展示は4月19日(日)まで)をはじめとする、より多様な書画をご覧いただけます。ぜひ会場で大坂の書画をお楽しみください。

16ページに展示案内を掲載しています。併せてご覧ください。

※図1～3は歴史民俗資料館の収蔵品です。

◆問合歴史民俗資料館

☎751・3019